

---

## 小川晴通先生追悼特集

---



小川晴道先生略歴（『経絡治療』第139号より）

大正3年 兵庫県生

昭和17年 麹町・杉並で鍼灸院を開業

昭和21年 世田谷で、昭和30年赤坂で杏林堂を開業

昭和53年 新宿野村ビルでも開業

昭和48年以降 東京都あん摩マッサージ指圧はりきゅう柔道整復等地方審議会委員

昭和23年に世田谷区鍼灸師会を、31年に港区鍼灸師会を創立

東京都鍼灸師会は理事、副会長を経て、48年以降会長

日本鍼灸師会は、監事を経て、48年以降副会長

日本経絡学会は、48年以降理事長

経絡治療夏期大学は、42年以降講師並に事務局長

---

---

## 小川晴通先生追悼の記

日本伝統鍼灸学会名誉会長 岡田 明祐

---

---

小川晴通先生の追悼文を綴るにあたり、冒頭に先生の表彰歴、功績調書の一節を借用し転載させていただきます。

「小川晴通先生は志操堅固にして研究心旺盛、かつ包容力に富み、人に接するに常に温和丁寧、指導力抜群で信望厚く人の長たる天性を具う」と有りますが、正に上記の通りの御人柄で、無類希有の鍼灸臨床家でありました。

昭和四十八年、三年間の東京都鍼灸師会々長に就任時、全国師会役員に請われ、且押され、日本鍼灸師会副会長に就任され、十年間に亘り各種業団との円満な結束と、全会員の診療実力の錬磨昂揚とを、事ある毎に誠意を持って然も謙虚に要請する努力が業界の各地に浸透し、然も地道に精進された結果、全国鍼灸師の資質向上が計られました。この献身的な努力は、東京都中央審議会委員として鍼灸教育の充実と鍼灸師の身分向上とに盡し、引いては健康保険取扱いの改善を初めとして、一般大衆への普及啓蒙に力を盡され、且国民の保険医療と福祉に貢献されました。

以上の功績により

昭和五十年五月 社団法人日本鍼灸師会会長（役員功労）

上記の表彰を授与されました。

引き続き

昭和五十五年五月 厚生大臣表彰（国民保健）

上記の表彰を授与されました。

先生は昭和五十八年、日本鍼灸師会々長に就任され、鍼灸・按・指・柔道整復等の各種業団の中央審議会委員として行政に協力された功績により

昭和五十九年十月 東京都知事表彰（保険衛生功労）

上記の表彰を授与されました。

更に特筆すべき事は、 国民の東洋医学に対する関心が昂まる中で、国民のニーズにこたえていく為には制度を改正して、鍼灸師の資質向上を図る事が不可欠と考えられ、業団七団体の意向を取り纏め「法改正推進協議会」を結成、同業者各位の学力と診療実力養成制度の改革、更には知事試験免許から大臣試験免許の引上げを内容とする法律改正に全力を傾注されたのであります。

その結果鍼灸師免許が現在の「厚生大臣免許」下附と相成った次第であります。

平成三年四月 勲四等旭日小授章（国民保健功労）

が下賜されました。

御本人、御家族御一統の最高の名誉であります。我等が業界等しく最大の栄誉とすべく感無量であります。

この度の小川先生の御功績は、正に希有なる事であり、鍼灸師ごときと謂はしむべき事でなく、学・術・俱に医療行政をして等しく矚目せしめた事は大きく、業界先哲の御庇護を載せ下賜された勲記であり、鍼灸協会各位の御労苦に深謝し、斯道同業と相俱に随喜すべき事であろうと存する次第であります。

さて、先生は業団に偉大なる業績を残されたのみでなく、鍼灸臨床の活動範囲が経絡治療・日本経絡学会（現日本伝統鍼灸学会）に於る御活躍の経緯が有りますので書き綴ります。岡部素道先生が昭和48年の年始頃「全国に散在する、経絡治療を標榜する同志を糾会し、斯道発展には理解ある同志の大同団結をして強力な雄叫びを推進すべきであると主張され、これぞ活動を開始すべ時であると、

東洋ハリ医学会の福島弘道先生とも計り、急遽経絡治療学会幹部を招集し、その中で、小川晴通・小泉治雄・岡田明祐の3名に、連日に亘る細部の、話し合いと、矢継ぎ早やの指示が飛び交ひ、人事選考は自から会長、副会長に福島、小野文恵、岡田明祐、理事長小川晴通、理事候補は両学会より9名宛の18名、顧問に東洋医学界より参加願ひ間中喜雄、矢数道明、大塚敬節、石野信安、石原明、藤田六郎、工藤訓正、中山友紀、橋本敬三、会計監査後藤金男、高橋泉隆、以上諸先生を選考、事前工作の根廻しを完璧に行い、万全な方策の許に短時日の間に準備完了をする等、全く今想いますと実に良く、やり遂げたものと想います。6月3日に東京港区ニッショーホールに、全国より300余名の同志の参加を得て創立総会を開催、今日の日本伝統鍼灸学会の発足です。実に時機を得た開会でした。適材、適所に人材の配置が見事な駒使いでありましたし幹部諸士が勤所を心得て、無駄無く活動を展開したお陰です。学術大会の内容も評判良く、経絡治療の実質の優位性が大きく全国に響き渡り、今日へ基礎作りの功績が燦然として残って居ります。茲後の30年近い今日の歩みが学術的にも、更には各々々の組織にも経絡治療の着実な発展を想い視る時、時宣を得た経絡治療家の素難医学を基底とした、医道護持が約束された想いで一杯です。

上記数々の絶大な功績の積み重ねは、体力に自信を持って居られた先生も、如何せん！懸命にして一途な精進にも、体力の限界を既に凌駕した結果を招き、意外なツゲが待ちもうけていたのであります。

平成三年五月、体調を崩され、都内「大塚癌研」に入院、診療を受けねばならぬ結果に至って居りました。

「業病は自からが酷使した咽喉部を蝕ばみ、浸蝕部摘出の止むなき病症の病体で有りました」。先生は、我武者羅な敢闘の結果に対する報いとして、当然な事と想えるほどで諸検査の総合診断は、極めて冷酷そのものであったと聞き及んで居ります。先生自身の心情とその無念さを推測するに余り有ります。如何に病態進行状態とは謂え、如何んとも致し方ありません。然し乍ら先生の術後診療経過は稀にみる、極めて良好な状態で再起に賭ける執念こそ渾身の努力と精進で有りました。退院後の日常生活は医療人としての復帰への努力は、何人も到底及びもつかぬ努力の積み重ねで、極めて短時日の間に診療実務の再開に漕ぎつけたのは、正に強烈な執念の権化と謂えましょう。先生は生きる為の伴侶に常時どんな場所へも「電気ミキサー」の携行が続きました。先生を身近かに識る人は一様に日々御存知の先生の姿が目に見えましょ。実に見上げた復帰意欲精進の毎日で有ります。連日油断のない九年目の元氣湧刺然し老化を迎える歩みも、今年四月、あつてはならぬ、とんでもない事故が突発したのです。近所の某百貨店内で転倒、身動き出来ぬ「転倒事故骨折」の重大事故が襲いました。救急病院、東京信濃町慶應病院へ、更には専門病院某外科と懸命な加療で一命は取り止めましたが、何分にも齢、八十五才の高齢、事故の、経過は想うにまかせず、加えて過去の旧病能に起因した、「過飲性肺炎」を併発する等々で、日々の経過が阻害誘因にも阻まれたとか、我等学会の誰彼がほとんど知る由もない、ここ三ヶ月余の病態は日毎悪化を迎える事の連続であったとの事で、先生御自身の苦痛は筆舌に盡し難くと申せましょ。又御家族皆様の御心労も案するに余り有ります。

病好転の気配更に無きままに、百日を過ぎ、七月十一日早朝、不帰の精霊となられて終わられました。残念無念遣る瀬ないことに盡きます。

只々安らかな昇天を祈念する次第です。

#### 再 拝 合 掌

実は過ぐる猛暑盛夏の一日を経絡治療学会会長岡部素明先生の祈念で「小川晴通先生追悼座談会」を、永い昵懇の間柄であった、「医道の日本社」戸部宗七郎老会長を中心にと発案され、横須賀本社に於て開催されました。岡部会長、戸部会長、島田隆司会長、岡田明祐、山口編集長の六名相寄り、旧盆の一日を想出の語らいを致しました事を併記致します。

先生と小生は俱に歩んだ経絡治療の軌道を想い起こしつつ、浄土へ旅だった。

「杏林院徹濟日晴居士」 合掌

岡田明祐拝

---

---

## 勲四等旭日小綬章小川晴通先生逝く

日本伝統鍼灸学会相談役 馬場 白光

---

---

小川晴通先生御逝去の報に接しました。謹みて哀悼の意を表し御冥福をお祈り致します。

小川晴通先生は、岡部素道先生を軸とする経絡治療集団の逸材でありました。経絡治療夏期大学では事務局長として、竹山・岡部・井上・丸山・石原先生等一騎当千の論客群を支えて、裏方万般を処理しておられた事を知る人も今は少なくなった事でしょう。

過ぐる日、故丸山衛先生が私に、夏期大学のOB対策を考えてはどうかとささやいたときそれは学会を作る事ですと即座に答えた。日を改めて上京し、小川晴通先生と岡田明祐先生と私と三人で帝国ホテルで会談した。結論は在京の二人で奔走してもらって経絡治療学会を組織することになった、御二人は岡部素道先生を動かしその勢で他の有志に働きかけて創立したのが日本経絡学会、現日本伝統鍼灸学会である。小川先生は要所要所で裏方さんとして活躍した人でした。

表に出ては、東京都鍼灸師会会長となり次いで日本鍼灸師会会長となって鍼灸界を指導されましたが、つねに鍼治療の立場からは逸脱すること無く、東京のど真ん中の赤坂・新宿で鍼治療を続けられました。患者の苦しみに鍼以って対応しながら会長職にあって業界を指導し、政治家・行政官と対応するところに業界代表として無限の底力の強さを感じておりました。小川先生は岡部先生と同じく職を離れず会長をつとめられました尊い存在でありました。

小川先生の秘めごと？の一つに埋没鍼がありました。岡部素道先生が下痢でひどく弱っておられたとき、小川先生が金鍼を埋没してあげて以来素道先生は見違えるように元気になりました。この話を聞いた私は早速、素道先生に金鍼を埋没してもらいました。

小川先生が喉頭を患って声の出が悪くなってからお会いした時、埋没鍼はいかがですかと問うと、腕と脚を撫でて、こんなに入っていますよと言い、東京から熱海まで自動車を自分で運転して来たということでした。その元気は金鍼の偉力かなと思いました。

私の治療室の窓に和紙の障子を付けているのは小川杏林堂の治療室のまねでした。

小川先生には多くの事を学びました。感謝申し上げます、先生は生前随分活躍されました。どうぞ安らかに休み下さい。

## 指南番小川晴通先生

日本伝統鍼灸学会副会長 首藤 傅明

昨秋亡くなられた上地栄先生が野武士的風 やぎゆうむねのり の宮本武蔵とすれば、小川先生は政・知・枝に秀でた柳生宗矩にたとえられる。

先生とはいろいろと絡みがある。

(社)日本鍼灸師会の会長に就かれた時、私は大分県の代議員だった。電話があって副議長になれという。政治に疎い私としては強く断ったが、先生系統の理事が少ない事情がわかると、無下にもことわれず協力の儀と相成る。議長は大阪の荒川嘉裕氏、氏のリードで何とか2年間努めた。2期めにもすすめられたが、同じ系統の奈良、福本憲太郎氏にお願いした。そのかわり、学術で臨床研の古典担当の講師を引き受け、以来10年近く続けることになる。

その臨床研、初日の講義、学術部長・出端昭男氏と小川会長と後の席で最後迄凝視していた。何を言いたすか、心配だったに違いない。講義の後、寿司をつまみながら両氏から発せられたことば、「話しがうまいねえ」。辛口の両氏の発言、感じるところがある。

総ての面で劣等感のある私は、特に話し方は不得意で大いになやんでいた。しかし、この言葉で勇気を与えられ、以来今日迄何とか話せるような状態になっている。

その帰り、おれが空港まで送ってやるという。電車のほうが正確に着くという出端氏を抑えて飲酒運転(?)で羽田まで。高速道路の途中、ビールのおかげで催しごと、空港まで我慢できない。道路添いにやれ、このところ、二重三重の違反、ムム、……。運転には随分と自信があったようで、最近まで運転を止めず、周囲をハラハラさせていたらしい。

学会では懇親会で席を共にすることが多かった。私と四国の池田太喜男氏と同席していると近づいて来て、曰く「2人とも勉強するのもいいが、顔色がよくない。ほどほどにしるよ」。今もあまりヨロシクナイ。

県の講習会に招いたことがある。前日、理事に事前講義をしてもらった。技術については硬軟両様、長鍼、細鍼、皮内鍼、三綾鍼と使い分けていた。狭心症に背中に4寸(?)

刺入して危機を救うと、モデルになって肺俞から肝俞付近まで皮下鍼、それも両側刺入。

そのあと交互に回旋する。悲鳴をあげた。イッポン。参った。

背部俞穴の皮内鍼もよくするところで、本治法は弟子にまかせ、この辺は俺がやるといっていた。知熱感度測定も太い線香で入念に行っていた。脉診処見と見事に一致する。科学的に証明されるのだ、と。

日本の、東京の一等地(新宿)で開業することの意味を問うたことがある。経済的には、うまい話ではないが、医師と対等の立場で仕事ができ、それを世間に認めさせたい。男の夢だよ。

その勝負度胸見事という外ない。東洋医学の評価が上がった今日でも勝負出来る人は少ない。

懇親会の後、二次会へ、唄はなかったが民謡の踊りを記憶している。財布を預けられた若い幹事、厚さんとまどっていた。大分でのコト。

知事免許から大臣免許に切り替えの時、秘策の教科内容を見せてもらったことがある。

東洋医学関係の教科の少ない現状を何とかしたいと、かなり多くを加えている。東西医学の比率を変えるわけで、内容について詳細に記載してあった。毎日の臨床と後輩の指導と、古典医学、現代医学との経験からのことと判断するが、頭の中、東洋医学一辺倒ではないことが分かる。理想は100%達成、とは行かなかったが、かなりの改善、時代の波もあり、21世紀には小川先生の理想以上のものになるに違いない。「脾虚肝盛の時代、それでヨロシイ」と言われるかどうか。

---

## 小川晴通先生を偲んで

日本伝統鍼灸学会副会長 工藤 友緒

---

平成11年7月11日、小川晴通先生が、享年85歳にて御逝去なされたという悲報を島田隆司会長より受け、私は一瞬言葉を失いました。

小川先生は、鍼灸界にとって大変大きな業績を残した方であり、私に対しても親友の様に接して頂き、常に尊敬の念を抱いていた私にとって大変なショックでありました。過ぎ去った先生との様々な思い出が走馬灯の様に回顧されました。

私事で恐縮ですが、私と小川先生との初めての出会いについて少し触れさせて頂きたいと思います。それは昭和48年、日本経絡学会の発起人として是非参加してほしい旨の電話による要請でありました。しかし私は、当時の私情により少し考えさせて頂きたいと申し上げ、即答を避けました。数日後に再度電話があり、是非是非鍼灸界発展のために、小異を捨てて大同について尽力してほしいと説得され、その先生の熱意に絆されて参加する事を決意したのでありました。それが初めての御縁であり、今にして思えば私にとって、伝統鍼灸への道を開いて頂いた大変な恩人でもあるわけです。

小川先生は周知の通り、日本伝統鍼灸学会の前身である日本経絡学会の創設に当たって献身的な御努力をされ、昭和48年創立後10年もの間理事長として学会の基礎を固められ、その後は副会長、相談役を歴任されました。と同時に、個性の強い各会派のまとめ役でもあり、その苦勞は並大抵の事ではなかったと思われます。本学会の今日を築く事ができたのは、一重に小川先生の御努力の賜物と心から感謝申し上げます。

更に小川先生は、昭和48年に東京都鍼灸師会会長に就任され、と同時に日本鍼灸師会副会長となりました。そして昭和58年には、日本鍼灸師会会長になられ、以後7年間に亘りその重責を担われ、鍼灸の発展と鍼灸師の資質の向上に務められました。その業績の全てはこの紙面では到底埋め尽くせるものではありませんので、ここではほんの一部のみを御紹介させて頂く事とし、詳細については日鍼会で小川先生と共に過ごされた諸先生方にお任せしたいと思います。

小川先生は、近年鍼灸の幅広い効果が再評価され、各医療機関に広く取り入れられつつある今日、「鍼灸は医師やPTが片手間に勉強して出来るようなレベルであってはならない。」とし、鍼灸師でなければ出来ない技術を磨くべきであると主張し、鍼灸師の専門性を高める必要性を説かれました。そうでなければ鍼灸は残るが、鍼灸師は生き残れないだろうとも説かれました。更に鍼灸治療に対する評価は年々高まってきているにもかかわらず、鍼灸師に対する低い教育や資格では社会的に高い評価を受ける事は難しいとして、業団7団体をとりまとめ、ついに「あはき師法に関する法律」の改正を実現され、養成課程を向上し、国家試験・厚生大臣免許実現に大きく寄与されました。

この事などは先生の業績のほんの一部なのですが、こういった先見の明に裏打ちされた進歩的行動力による永年の実績と功勞を評価されて、平成3年、勲四等旭日小綬章という素晴らしい名誉ある栄典を叙勲されました。この先生の榮譽ある勲章に傷がつかぬよう、私達一同臨床・教育・制度の改善等に全力を尽くす事が小川先生へのせめてもの御恩返しだと思います。

そのためには、小川先生が過去本学会の講演を通して、本学会を始め鍼灸界の今後の課題であるとして警鐘されてきた事を、今一度ここに銘記する必要があると思います。

始めに昭和62年、日本鍼灸師会会長として、本学会第15回学術大会長崎大会における特別発表の中からであります。そこでは本学会のあるべき姿についてはっきりと明言されています。

それは第一に、全ての事象に対して科学的裏付けを要求される事があたり前になっている今日、鍼灸医学は今原点に帰り、その重要性を再認識しなければならないという事。

第二に、長い年月をかけて伝承されてきた鍼灸術は、明治以後鍼灸師によって何とか守られてきて、昭和に入ってから古典に則って更に開発され、その学問的体系を明らかにされたが、今後は本学会

がその伝承と発展の床柱とならなければならない大きな責任があるという事、であります。

また平成元年、来たるべき鍼灸医学の将来を予測して、本学会第17回学術大会会頭として、「10年後に必ずやって来る高齢化社会・先端技術を駆使したハイテク医療の発達・鍼灸の科学的解明の進展、こうした21世紀を迎える中で、如何にして、鍼灸の伝統を守り発展させ、古典に立脚した伝承医学の基本を継承して行くべきか、まさにこれは、我々経絡治療家に課せられた最重要課題であります。(原文のまま)」と述べられています。

以上の論旨は今現在においてもなお生き生きとし新鮮であり、私達鍼灸師一人一人が気持ちを新たに、小川先生の遺志を汲み、日々精進する事こそ、先生の業績に報いる事ではないでしょうか。

一方治療面においても、小川先生は経絡治療的な立場から、膝関節疾患は肝経の証が主体となるという仮説を立てて、症状の悪化度(類型数)と治療回数との間の相関係数を割り出し、それを臨床に応用した発表をされ、証の正誤の判定に活用された。

又先生は、経絡治療の中に現在の臨床に具体的に対応した運動鍼を取り入れ、それを解剖学的な取穴でなく、経絡変動と結びつけて考えておられた事などは、臨床家としての小川先生らしく、若い鍼灸師にとって非常に参考となるものでしょう。

先生のこうした研究発表は数多くあると思いますが、中でもやはりムチウチ症治療が第一に挙げられると思います。

私がこの講演・実技を拝見できたのは、昭和45年頃東京都鍼灸師会の主催による鍼灸の技術公開の時、家の光会館においてでありました。その巧みな刺法と説明の中で、肘の一角に「小川点」と名付けられた、非常に有効な穴のある事を紹介された事が記憶に生々しい。その卓抜な、臨床実践に適った刺手法技を持ち合わせた小川先生を失う事は、鍼灸界にとって大きな痛手であり、残念でなりません。

小川先生と言えば、私にはどうしても忘れられない思い出があります。それは昭和50年頃だったと思いますが、日本鍼灸師会の学術大会が名古屋で開催されたその帰り、途中の三河湾・兎島にて昼食をとった折、小川先生いきなり、「工藤先生、相撲取ろうよ。」と誘われ、私も驚き、「えっ？どうしてですか？」と聞き返したところ、「俺もまだまだ頑張るからついて来い。」との事。私も柔道をやっていた経験があるので、負けてはいられないと思い、四つに組んでやり合いました。勿論お互い勝負などはつけませんでした。四つに組んだその先生のお体からは、先程のお言葉通り、これから向かっての情熱というかパワーがひしひしと感じられ、私もそれに応じたのを今でも鮮明に体で覚えております。

先生は後年に至ってもそういう前向きな姿勢を変えず、叙勲をお受けになって、大病を患われた後もなお、伝統鍼灸の伝承のために沖縄の地に行かれ、学術指導をなさっておりました。私も現地の方がその時の講習会を有難く話していたのを耳にしています。小川先生の姿勢を如実に物語っている出来事の一つだと思います。

小川先生は、本学会創設当初から大いに貢献された方であると先に述べましたが、と同時に御人柄についても最高な方で、当時の岡部素道会長のそばで名参謀としてこまめに行動しておられた事や、御自身の赤坂の治療室を長期に亘り理事会の場として供された事などは、先生の犠牲的精神の表われであり、先生でなければ決して成し得なかった事だと思います。

先生の気配りは、大局のみならず個人レベルにおいても同様で、常に関係者を気遣い、いつでも唯通り過ぎずに、先生の方から声をかけて来られて手を握って、「御苦労様、やっていますね。」と労っておられました。とても気さくな御人柄で、非常に輝いていた方でありました。私にとっても、大変心優しい先生でありました。本当にありがとうございました。

小川先生と親密に、2~30分ぐらいお話してきたのは、平成7年3月の第10回経絡治療学会学術総会の時で、それが最後となりました。今は唯、小川先生の御霊が安らかであり、日本鍼灸界を見守って頂く事を切に願い、偲ぶ言葉と致します。

---

---

## 小川晴通先生を悼む

日本伝統鍼灸学会副会長 森 秀太郎

---

---

小川晴通先生とは随分長いお付き合いで、兄弟以上にいろいろご相談させていただいたりご面倒をおかけしたように思う。先生の業界におけるリーダーとしての御活躍、学会におけるご業績は私が列挙するまでもなく、各界の知るところである。そんな先生であるが大家に似合わず、ひょうひょうとしておられて、何でも遠慮なく言える御人柄であった。

経絡治療派の大家として、東京でも一等地の赤坂の治療所は何時でも患者さんが溢れていた。治療所の立地場所といい、広さといい、スマートなインテリアといい、当時見学させていただいて、ただただ驚くばかりであった。大阪の治療所とは異なった雰囲気をもっていた。

小川先生を団長として中国に行く機会があった。あれからもう何年になるだろう。以来パンダ会と称して、毎年全日本鍼灸学会がある度に中国行きを共にした団員の人たちが親睦を兼ねて集まっていた。先生の人徳が、毎年当然のように人が集まってかれこれ20年を数えるのではないだろうか。

あるとき、先生が扁桃の癌で大手術をされ、固形物が喉を通らなくなられた。それでも先生はパンダ会に参加され、胃の中に入れば皆一緒になるのだからと、出された御馳走をすべてミキサーにかけ、食された。その様子は、先生の生に対する信念と療養の手本をみせられるようで感嘆させられたのを覚えている。大阪で会合があるときは重いミキサーをさげて必ず出席されるご熱意に、ほとほと感心させられるとともに人としての生きさまを教えられるようであった。

手術以後だんだん健康を回復され、もう大丈夫と思われた矢先の御訃報であった。腰部の骨折とかで、生命には別状無いと考えられていたので、かえすがえすも残念ではない。

私の所属する大阪鍼灸専門学校には、監事としてご病気になる前から、学校教育はもちろん経営についてのご指導とご援助をいただいた。改めて感謝を申し上げたいと思う。

長い間の御闘病で、ご本人はもとより奥様の御苦勞も大変だったと察します。奥様にお会いした際、先生ともどもよく頑張られましたねと申し上げました。

それにしても鍼灸一筋に一生を過ごされたことは悔いのない人生だったと思います。

心安らかにお眠り下さることを祈念してお悔みの言葉とします。



## 父を偲んで

日本伝統鍼灸学会常任理事 小川 卓良

追悼特集に、息子が書いて良いものか悩んだ末書くことにしましたが、書き出すと長くなるので、簡単に書くことにしました。

私が鍼灸師になったのはもちろん父の影響でしたがその時は鍼灸師という職業を選ぶのではなく、父の跡を継ぐということだけでした。父は精力家でしたし、鍼灸師という職業に誇りを持っていたので、私も継ぐと決めてからはごく自然にこの世界に入りましたが、入ってから初めて社会的に地位が低い職業だということを知りました。もちろん高い職業だとは思ってはいませんでした、これほどとは思わなかったというのが本音です。高校時代に私より遥かに成績の悪い連中が医学部へ行き、彼らとの距離の差にびっくりしたものです。そして、「盲人でもできる職業について恥ずかしくないのか」または「盲人の職を奪って心が痛まないのか」という厳しい指摘を受けました。私は、工学部へ行き大学院に行っており途中でこの世界に入りましたので、その時は24・5歳でしたからもう既に医師になっているのもいたわけです。親父の背中とこの二つの言葉に対する回答を見つけることが、私の鍼灸師としての生き様のような気がします。

私が鍼灸学校の1年の時に親の七光りで中国に行くことになりました。当時の父は東京都鍼灸師会の副会長か会長であったと記憶しています。そこで一緒になった鍼灸師の方々との交流も私にとっての財産でした。また、この年に日本経絡学会がスタートし、父が理事長となり、私も理事にされ、父の使い走りをさせられました。

また、私が継ぐと決めてから杏林堂を大きくすることを考え、当時としては画期的な内装で、赤坂の一等地にあるビル内に53坪(ベッド13台)もの鍼灸院を開設しました。これも同じ年です。開設祝いのパーティに出席したある医師は、「鍼灸師のくせに大したもんだ。」と半ば自嘲的に仰ったのを小耳にはさんだらいいです。

この年は、大学院を休学し鍼灸学校に入り現実を知り、中国に行き、経絡学会の創設に関わり、杏林堂を新装開設し、かつ煙草を止めるという大変な年でした。煙草も親父は吸ったり止めたりしていましたから、これらは全て親父の影響です。それ以来、精力的な親父の仕事の陰の手伝いを長年させられたという思いがあります。

赤坂で新装開設してから、数年後に西新宿に野村ビルという50階建ての高層ビルに入らないかというお誘いがありました。一時の鍼麻酔ブームによる患者増も一段落して患者数が減少傾向にあった頃ですし、赤坂も賃貸で高額な家賃を払っていて、その上にまた保証金・敷金・内装費などを借金し、月々の家賃が倍増するなどということは、共同経営者としてとても受け入れられる状況ではありませんでした。親父はいずれ私が鍼灸師として一人前になったら赤坂だけでは手狭になるだろうと踏んだのか(妹の主人も一緒に働いてましたから)、船頭が多くなるのを嫌ったのかはわかりませんが、積極経営でスケールメリットを求めろ方を選びました。といっても正直なところは、天下の高層ビルに鍼灸院を構えるという魅力(通常のアプローチではなかなか借りられない)に惹かれたというのが本当のところでしょう。その数年後に、赤坂と新宿を分けて独立採算にすることになったとき、父は悩まずに新宿を選択したことからもわかります。基本的には見栄っ張りです。また、父の体力が落ち新宿と赤坂を統合しようということになったときも新宿を残すことを主張して譲りませんでした。実際には新宿(30坪)では手狭ではあったのですが、父は元々頑固者の上、年がいてその頑固に磨きか掛かっていましたから、まあしょうがないということになりました。こう振り返ってみると、ことあるごとに私の方が譲っていることに気がつきます。しかし、院長職は有無も言わず奪い取りました。50歳近くになって80歳の老人を長にするということは、私も譲れませんでした、そのことは私には何も言わず、他の弟子には「息子に乗っ取られた」といっていたそうですが。

一人の弟子として、師匠としての父はどうだったかという、昔のタイプの師匠ですから、もちろん勉強会をしたり、手を取って教えたりは全くしない師匠でした。あくまでも盗めの姿勢ですから教わったという記憶はほとんどありません。息子だからといって他のお弟子さんより特別に優遇されたということはありません(ただし共同経営者でしたから、経営面では対等でしたが弟子として)。

ただ、親父が治療していた何人かの患者さんには良く手つきがそっくりだと言われました。自然と見ている内にそうなったのか、遺伝子に組み込まれていたのか(私は親父が32歳の時の一滴で母の胎内に宿りましたので)はわかりませんが、治療法は決して同じではないのに他のお弟子さんとは若干違うそうです。

さて、25歳で杏林堂に入って、毎日10人分の食事を作るために包丁を使いながら「大学は出たけれど、包丁一本、白衣に巻いて」と愚痴愚痴歌っていたのを思い出します。この点は徹底してました。鍼灸師会の会長を長年続けてましたが、その間は絶対に息子を理事にはしないと決めてました(ただし経絡学会の理事は使い走り役で、鍼灸師会の理事とは性格が違ってました)。私の方も、親父に色々吹き込んで陰の総理気取りでいましたから、かえってやりやすかったという思いもありますので不満は全くありませんでした。ある時は、少し酔っぱらって「これからの鍼灸界はこうなるから、ここでこういうビジョンを持ってどうのこうの」と説教を始めましたが、一字一句私が以前説明したとおりで、ニュースソースを忘れてその相手に話すと言うことはしばしばありました。私の女房の父は道路会社の役員をしてましたが、その父をつかまえて「日本の道路は」をやりだしたときは真っ青になりました。何しろその話はその父から以前聞いた話だったのですから。これは父の欠点でしたが、人の話をよく聞くというのは素晴らしい長所であったと思います。ですから、ビジョンを持って人をどんどん引っ張っていくということは苦手だったと思いますが、色々意見が違う人をまとめるのは得意だったと思います。財団(東洋療法研修試験財団)設立の頃、「親父は元気か?」と聞かれると職場も違い(赤坂と新宿)ほとんど会うこともなかったので、「親父のことは後藤君に聞いてくれ」とよく言っていました。東京衛生学園学園長で学校協会の副会長として財団設立に関わった後藤修司先生とは毎週のように会っていたようです。この後藤先生が「小川先生がいなかったら財団はできなかった」というようなことを良くおっしゃっていました。これは、相手の話を良く聞くということと、調整能力があったということだと思われれます。随分親子で性格が違うと実感します。

親父の前の会長であった木下晴都先生は、親父とは違いどんどん引っ張っていく性格でした。しかし、リーダーたる者が全てそういうタイプでは駄目で、時には親父のようなリーダーが必要な時代もあるということだと思いますし、親父を必要とした時期に会長をやれて、それにあった評価を得られ、親父は幸せだったのではないかと思います。

柳谷素霊先生、井上恵理先生、岡部素堂先生などを始め、木下先生や親父などの漢方復興を果たした第一世代の人々がどんどん亡くなっていくのは寂しい限りです。第2世代の先生方や、我ら第3世代も鍼灸学の発展、鍼灸師の身分向上、そして国民の健康により寄与するために、第一世代の革命的な素晴らしさを見習ってより精進しなければならないということでしょう。まだまだ大分負けていますから。

私には、3人の父がいました。名付け親の岡部先生、仲人の木下先生、そして親父で、その何れも亡くなってしまいました。皆、鍼灸界に素晴らしい足跡を残した人々です。私も勝てないまでも、少しでも近づけるように頑張りたいと思います。親父、そのうち天国で鍼灸界の将来を語り合いましう。それまで、待っていてくれ。

座 談 会

# 故小川晴通先生を偲ぶ

出 席 者

岡 田 明 祐 経絡治療学会副会長  
戸 部 宗七郎 医道の日本社会長  
戸 部 雄一郎 医道の日本社社長

島 田 隆 司 日本伝統鍼灸学会会長  
小 川 卓 良 杏林堂院長  
岡 部 素 明 (司会)

平成11年8月22日 於：医道の日本社本社  
相 澤 良 (テープ起し文責・補遺)

## 小川先生との出会い

岡部 本日はお忙しい中お集りいただき、ありがとうございます。

小川晴通先生は7月11日に享年85歳で天寿を全うされました。社団法人日本鍼灸師会会長として大きな功績を残されたことは余りにも有名ですが、今日は小川先生の経絡治療学会や日本経絡学会(現、日本伝統鍼灸学会)における功績やお人柄、思い出話などを含めて幅広く語り合い、小川先生を偲びたいと思います。

まず戸部宗七郎先生、昔ですね、戦前の話になると思いますが、小川先生と初めて会われたのはいつ頃ですか。

戸部 90歳になるといろいろとありましてね。小川先生のことで一番覚えているのは自動車免許のことですね。私も50歳の頃に免許を取ったんですが、小川先生はその翌年に免許取って、車に夢中になっていましたね。私の家にも車で来てね、あちこちぶつけていたようだったけど。(一同爆笑)

間中先生も来たことがあって、同じようにぶつけていたね。

戸部(雄) 当時は自動車を持つことが大変な時代で、車の免許を持つのは嫁さんをもろうよりも難しかったんですよ。それほど難しいことだったんです。

小川 当時は弟子の女性に男装させて講習を聞かせに行かせたりしたようです。だって時間がない

から。ともかく車が好きでしたね。当時はトヨペット・クラウンだったかな。そして80歳を過ぎてまで運転していましたね。

岡部 夏期大学を熱海でやっていた頃、先生が一人で車を運転して来られたのにはびっくりしました。

そうすると戸部先生は戦前に小川先生と会われたことはなかったんですか。

戸部 私も兵隊にいていましたから、会っていませんね。

岡部 岡田先生はいかがですか。

岡田 私は竹山先生と一緒に、赤坂の木造の家に住んでおられた頃に、夏期大学を一緒にやろうと訪ねたのが最初です。昭和30年頃だと思います。

岡部 私の記憶ではもっと早くお会いしてますね。昭和20年代の半ばには、小川先生が世田谷の野沢に住んでいて、駒沢にあった親父の家によく迎えに来ていたのを覚えています。当時はもちろん車なんかありませんから、電車か何かでどこかの会合に行ったんだと思いますが。

戸部 私も車が好きでね。商売にも個人用にもずいぶんと乗りました。小川先生も4年前位までは乗っていたんでしょ。私も年とって90歳になった4月からやむなく乗るのをやめたんですが、不便で不便ではない。(一同爆笑)

小川先生と経絡治療学会

岡部 では話を進めまして、小川先生と経絡治療学会との関わりということから話をさせていただきたいと思います。

昭和44年に経絡治療研究会（経絡治療学会の前身）と夏期大学の事務局が赤坂田町の小川先生の所に移っております。

夏期大学についていえば、第1回から第10回までは医道の日本社が主催され、昭和44年の第11回から経絡治療研究会の主催になったわけで、学会主催の1回目から小川先生が事務局長として夏期大学を運営されたわけです。同時に学会の事務局も運営されたということで、小川先生は学会の基礎を作られたという大きな功績を残されています。夏期大学の事務局長は昭和53年の第20回まで務められています。

岡田 昭和44年だったと思いますが、竹山先生がなくなられてその善後策をどうするかということで、私と岡部・石野・丸山・豊田・島田・小川・藤木・和田というメンバーで幹部会を開いたことを覚えています。

岡部 私も当時、夏期大学の下相談があるからと小川先生に呼ばれて、よく赤坂まで行きました。小川先生の治療室が50坪くらいあってとにかく広くて清潔な感じにびっくりしたことをよく覚えています。とにかく小川先生を中心にてきぱきとうまく運営されているという印象でした。

戸部（雄） 今では夏期大学の歴史を知っている人は少なくなってしまったんですが、医道の日本社が第10回まで夏期大学の運営一切を取り仕切っていたんで、学会の方はどなたもどのように運営すべきかをご存知なかった。あの時に小川先生が当時の本社に来て、私も立ち合いましたが、運営を本気でやる気持ちでどう準備するかのようなことが必要かを熱心に聞きに来られたですね。

戸部 第10回までの資料は前に送りましたよね。

岡部 いただいて大切に保管しております。当時の役員名簿・参加者名簿を見ると、今日の鍼灸界の重要な地位におられる方々のほとんどが夏期大学に参加していたんだということがよくわかります。小川先生が当時の経絡治療研究会の活動拠点として活躍されていたことはまちがいないと思います。

（追補1） 小川先生の足跡の項でも触れられていますが、小川先生と経絡治療との関わりという点は、旧関西鍼灸専門学校から故木下晴都先生等と上京して岡部素道先生が主宰していた私塾で勉強されたのが始まりと思われます。もちろん戦前の話です。詳しくは54号（昭和53年7月）の再録「小川晴通先生を囲んで」をご覧ください。

小川先生は召集されたため戦前の在籍期間は短かったようですが、復員後も素道先生に師事され、経絡治療の考え方による臨床を確立されました。素道先生を「親父」と呼び、経絡を離れた鍼灸治療はダメだとつとに強調されていました。

おそらく研究会や夏期大学の運営を忙しい中一手に引き受けられたのも、経絡治療への情熱があったからこそと思われます。

（追補2） その後の経絡治療学会との関わり

夏期大学関係では、昭和53年の第20回まで事務局兼講師を務められた後は、日本鍼灸師会副会長という公職にある以上は夏期大学役員を続けることは好ましくないという理由で、それ以降の役員を辞退されています。

日本鍼灸師会会長を辞された平成3年の第33回から講師に復帰され、研修科臨床教室等で後進の指導に当たられました。

昭和62年の第29回には日本鍼灸師会会長として「鍼灸の今日的展望」というテーマで夏期大学で講演されました。

学会役員としては、師会長を辞された平成3年から副会長に就任されました。

この頃は会則改正問題や地方組織問題等の懸案があり、多くの貴重なご意見をいただきました。

また平成2年1月の学会創設50周年記念大会では師会長のお立場で特別講演され、経絡治療学会発展のため長年にわたり功労があったということで、学会より功労賞を受賞されています。

## 日本経絡学会との関わり

岡部 昭和48年6月に日本経絡学会が創立され、会長が岡部素道、理事長小川晴通先生で第1回から第9回まで運営され、第10回学会時に副会長に就任されている。第17回では会頭を、第20回まで

は副会長を務めています。平成5年の第21回から6年間は相談役となっています。

岡田先生から創立当時のお話をうかがいたいのですが。

岡田 日本経絡学会は経絡治療関連の諸団体を集合させようという岡部素道先生のお考えでできたものです。小野文恵先生、福島弘道先生、小川先生、そして私为中心となって話し合い、小川先生を運営委員長として、昭和48年6月3日、日商ホールで旗揚げしたわけです。第1回～第3回、第5回、第7回と小川先生が運営委員長をされています。

岡部 創立当時は経絡治療研究会と福島先生の東洋はり医学会が中心メンバーで、自分たちがやっている臨床の成果を発表する場を作るということが主な目的だったんですか。

岡田 その通りです。

島田 小川先生は素道先生を師匠と仰いでおり、素道先生を頭に立てて日本鍼灸師会と対抗できる勢力を作りたいといった意図もあったと、小川先生からは聞いたことがある。表立っては経絡治療各派の学術的な研鑽を深めようということだったが、裏側では小川先生の師匠思いの一つの現われではなかったかと思いますね。

岡部 小川先生はじめ岡田光先生や馬場先生が親父を持ち上げてくれたからうまく行ったんでしょうね。

日本経絡学会も第11回の岐阜大会あたりまではおもしろかったですね。当時は理論的に荒削りではあったけれど、いろいろなやり方や考え方に触れられて楽しかったですよ。

岡田 小川先生は第10回の時に副会長になっているんですね。他に福島先生、小野先生、馬場白光先生が副会長で、私が理事長だったんです。確か第8回まで小川先生が理事長兼運営委員長で頑張っておられたと思います。

小川 第8回は日本青年会館でやったんですが、ここは二、三回使ったことがあって、一般の使用受付は半年前からなんです。ところが学会というものは一年前に日程が決まるでしょ。そこでTBSのお偉方を通して一年前に会場確保したりして、いろいろと苦労していたようです。

岡部 昔の方が何か決めるにしてもスピーディだったような気がしますね。

小川 素道先生がよきにはからえ、おまえにまかせたといつて、後でごちゃごちゃいわない人だったから。

戸部(雄) そういうことが大事なんです。

島田 素道先生は星回りをよくみていたでしょう。小川先生は五黄土星だから任せておいて大丈夫だという考えがあったんじゃないですか。

岡部 うちの親父は三碧だから星回りからすると小川先生は苦労されたんじゃないかな。木に剋されて大変だったと思うけど。

小川 親父は本名を小川晴(おがわ・せい)というんですよ。女性に間違われるということもあって戸籍を変えてもらったんですよ。「通」という木性を入れて、小・川・晴という水性三つとバランスがとれるのかなと思ったんですが、五黄土があるからよかったのかなと今は思いますね。

### 小川先生の鍼灸術

岡部 先生はどこで生まれたんですか。

小川 丹波篠山です。兵庫県のど真中ですね。

岡部 それから山口県の湯田温泉に修業に出ると聞いていますが。

小川 17歳の時ですね。結核を患ってまして、その治療ですね。湯田温泉の盲人の女性の先生に付いたんですよ。患者として治療を受けるより弟子に付いた方が安いというんでね。

戸部(雄) みんな結核なんだ。岡部素道三、戸部宗七郎、そして小川晴通と。

岡部 小川先生が最初に付いた先生は非常にカンが鋭い人で、患者の足音を聞いただけで誰でどこが悪いのかがわかった、という話を先生から聞いたことがありますよ。そこで先生は鍼の技術を覚えたわけです。

それから先生は鍼灸学校に行っているんですね。学校で病人が出ると生徒である小川先生が呼ばれるというくらい、その時にはすでに鍼ができてたんですね。

小川 その時の同級生が木下晴都先生とか北田先生、千葉の梅谷先生なんかです。旧関西鍼灸専門

学校ですね。それから4人で上京するわけです。

当時は鍼灸師の免許を取るのに学校を卒業する必要はなかったんですが、旧関西鍼灸の同級生4人で上京したわけです。

親父の免許を見ると鍼は警視庁で、灸は世田谷なんですよ。ですから灸免許は戦後に取ったんですね。鍼専門という意識があったためだと思います。一同 なるほどね。

島田 小川先生から初めて名刺をいただいた時、「鍼医」と書いてあってびっくりしたのを覚えていますよ。

小川 戸部先生のお父さんと同じで、戦時中は衛生兵で、所属の中将からかわいがられて、本当は二等水兵なのに軍医待遇で、軍医は3年で卒業して来るから何もできないんで、盲腸の手術から何かからみんなやっていたそうです。手術道具も持っていましたよ。

岡部 器用なんだね。小川先生の鍼を見ていると、その技術はすごいなって感じていたんですよ。一見するとぞんざいで荒っぽく見えるんだけど、そして深刺しもするでしょう。だけど無痛なんだよね。

小川 経絡治療第一世代の人達は衛生兵だった人が多いでしょ。そこでの経験というのは非常に大きいと思うんですよ。

岡部 今の鍼灸師の最大の弱点は、急性病や命にかかわる病気にめぐりあえないということですね。半健康人ばかり相手にしているわけですよ。そこへいくと昔の鍼灸師は赤痢や腸閉塞といった命にかかわる病気をたくさん診ていたわけですよ。脈から何かからね。

戸部(雄) そうそう。昔は病気になっても医者は少ないし高いし。医者にかかることは大変なことだったんですよ。

岡部 医者にかかる前に鍼灸師にかかるというルールみたいなものがあったんですね。

島田 小川先生は結核療養所でも治療に当たっていたことがあって、その頃の話はよく聞きましたね。例えば生シイタケを食べると腎虚になるよっていう話。

小川 結核療養所での経験ということでは、夫や

子供のいる女性は自分が何とか世話をしなければという気が働くから治るが、子供のいない女性は夫からいつ離縁されるかということばかり考えているから治らないという話とかね。結核療養所に鍼灸師がいるなんて今では考えられない話だけでも、衛生兵をやっていた関係でそうなったと思いますね。

岡部 結核には鍼が非常によく効くんです。ただ欠点がある。それは症状がよく取れるものだから患者が治ったと錯覚して動きすぎてしまうという点です。動きすぎて悪化してしまうことがあるから気をつけるということです。

小川 井上恵理先生が最も得意としていたのが結核だったんですね。当時は一般的な病気でしたから。

島田 免疫抵抗力を高めるということですね。癌だって何だって症状は楽になるからね。

岡部 昔の人は要穴に鍼をして全体を調べれば内臓疾患はよくなるということを知っていたんだね。

小川 親父が最も大切にしたのは兪穴なんです。

島田 昔ね、私と友人と小川先生の3人で箱根に行ったことがあるんです。そしたら友人が車酔いしちゃってたいへんだったんですよ。その時小川先生が右肝兪一穴だけね、鍼したらスツととれちゃったということがありましたね。すごいなという感じですね。

小川 親父は兪穴を単刺で打つんですよ、自分で。他は要穴とかは弟子がやってね。

岡部 それは変わってるね。私なんかは要穴だけは自分で打つけどね。要穴は大事に思っているし。

小川 その意味では経絡治療としては異端でしょうね。鍼も深いし 兪穴の片側治療もよくやるしね。

岡部 夏期大なんかでは両側治療をやってたけどね。

小川 片側の兪穴しか使わないことが多くて、両側使うことの方が少ないですね。

岡部 鍼さばきがよくて、ともかく早いよね。

島田 鍼を軽々使うという感じね。

小川 やっぱ17歳からやっていたからね。

岡部 そればかりでなく、やっぱり器用なんだよね。

## 日曜大工、カメラ、小川点

小川 まめだしね。日曜大工なんか好きだった。

岡部 そういえば写真が好きだったよ。

小川 好きどころか現像室までもっていましたよ。

岡部 私も小川先生に一度一言ったことがあるんですよ。先生が東京都師会の会長になった頃だったかな。写真撮って歩くのはやめて、どっしりとして写真を撮ってもらった方がいいって。

小川 いつだったか、演舞場か何かで伊志井寛の写真をやらせてもらったことがあるんですよ。お金もらったかどうか知りませんが、並いるプロを差し置いてやったんですね。それくらい写真は好きだったですね。

岡部 いいカメラ持ってたしね。

戸部(雄) 小川先生は好奇心旺盛だったんですよ。赤羽刺法とかカイロプラクティックとか、ずいぶん熱心だったもんね。僕は正直だなんて思ったね。患者は理屈通りに治るもんじゃないし、そこで臨床家としてもがいていて、その解決法としているいろいろをやっていたという点も知っていた方がいいと思う。

岡部 臨床家としては当然だと思うよ。

治すためには何をやってもいいということが基本にあるべきだね。理路整然とやるのではなくて、その患者を治すには何をするのがベストなのをよく考えることが重要だと思うよ。

小川 中国に行った後にね、中国鍼にこっていた時期がありましたね。中医学でやっていたわけではないですが、眼なんか中国鍼でプスッと行くわけですよ。

私が鍼灸師になったのがその頃ですから、私もこれで眼をつぶしちゃったらこれで終わりかと思ったもんです。とにかく中国鍼であふれていましたね、あの頃は。

戸部(雄) それで終息しちゃったの。

小川 何年かかぶれるわけですよ。何年か一生懸命にやってからまた原点に戻るわけですね。俞穴一本に手足だけという形にね。

戸部(雄) その過程で治療が一度むけることになるんですけど、変則の俞穴治療ということ

ですか。

小川 手足の要穴をやって俞穴をやって、その後頸肩をやって終りという形ですね。結局はいろいろやっても原点に戻るといことですね。晩年はそういう形でした。

岡部 もう一つすごいなと思ったのはムチ打ちの治療ね。小川点というのを作ってね。システムチックな形にして発表したでしょう。かなりの影響があったと思いますよ。

小川 鍼はかなり深いですね。

戸部(雄) あなたはそのやり方を継いでるの。

小川 継いでますよ。小川点のとなりに卓良点というのを作っているくらいですから。(一同爆笑)

岡部 小川先生の考え方で治療している人は多いと思うよ。わたしなんかは小川先生ほどの刺鍼技術がないから深くは刺さないけれども、実際に使ってみてよく効くというのはわかるね。

小川 小川点は頸部だけではなく、手の三焦経の裏三里にもあるんですよ。中国では昔の落枕穴です。四流とはちょっと違うんですよ。今の落枕穴は手の甲にありますかね。中国が親父のを取ったんだと思いますね。中国は早いですから。

昔、赤羽刺法ね、中国へ行ったら赤羽刺法やっているから、日本に帰ってきて赤羽先生が中国のマネしているんだといったら、実は中国が赤羽先生のマネをしていたんだという話もあるくらい、中国は早いんですね。日本で出たものはほとんど中国では目を通していませんよ。

## 赤坂と新宿へ進出

岡部 他にエピソードはありますか。

小川 世田谷の野沢から赤坂に移った話がありますね。どこに移ったら患者が最も多くなるかを考えて赤坂にしたんです。赤坂に移ってから赤坂が発展し、近くにTBSもあったんで、一時期芸能人とか政治家がたくさん来ましたね。永田町にいるよりも小川先生の所の方が裏話が聞けるからと訪ねてきた政治家がいたくらいでしたから。地の利ですかね、TBSも近いし、永田町も近いし。

前に戸部さんにどんな芸能人や政治家が来ているのか一覧表に出してくれといわれて、調べて出

したら、これ全部じゃないかといわれたくらいで。岡部 腕がよくなきゃ患者は来ないよ。地の利だけでは無理だよ。

小川 うちに来て鍼はいいということがわかって他の所へも行くようになったという面もありますね。

それと赤坂のビルは広くて明るくて清潔そうに見えたということかな。

戸部(雄) 赤坂の木造の家ではいつまでやってたの。

小川 赤坂に行ったのが昭和29年で、昭和48年までかな。その後がビルです。

岡部 ビルの中で治療院を開くというのは当時は画期的でしたよ。50坪あって家賃が月50万円だと聞いてびっくりしましたよ。

小川 その後、月140万円までなったんですよ。それで四、五年前に閉めたんですけど。

戸部(雄) 新宿の野村ビルに行ったのが昭和52、53年頃だったでしょ。

小川 新宿に行ったのはその頃だけど、最初のうちは親父は赤坂と新宿のかけもちだったんですよ。新宿一本になったのはずっと後です。赤坂のビルに親父がいたのは昭和48年から58年までですね。

島田 東京都鍼灸師会の会長になったのが48年で、日本鍼灸師会の会長が58年でしょう。ちょうど節目に当たっているね。

小川 それより私が後継で入ったからです。私が鍼灸学校に入ったのが昭和48年で、後継が決まったから少し広くてきれいな所でやろうかと、そういうことだったのでしょ。

岡田 新宿は何年から。

戸部(雄) 昭和53年でしょう。私が新宿の店を開いたのが52年で、野村ビルに私がベッド7台自分で入れたんですよ。

当時は力があったから。特注のベッドでね、問屋からレンタカーで納入したんです。

岡田 赤坂はいつからいつまで。

小川 赤坂田町の木造の家が昭和29年から48年まで、その後が赤坂一ツ木の53坪のビルということですね。

## 広く明るく清潔な治療室

戸部(雄) 赤坂のビルはすごかったですね。

岡部 画期的だね。鍼灸が事業として成り立つということを示した点は大いに評価されるべきでしょう。

小川 投資をしても充分成り立つ仕事だということと、もう一つ、イメージを変えたという点もありますね。暗い狭い部屋でセンベイトンの上でするといイメージがら、広くて明るくてきれいで清潔な所でするといようにね。

戸部(雄) 今はビルの中でというのが当り前のようになってちゃって、逆に木製の方が落ち着くなんていっているけどね。

小川 新しもの好きでしたね。

一同 そういう点はあったね。

島田 そういえば小川先生が師匠である素道先生に反論したことがありましたね。全日本鍼灸学会ができた時、日本経絡学会に参加するよう要請があつて、素道先生と福島先生は医師の下僕になるような道はとるべきではないと主張したのだが、小川先生は全国組織の中で経絡治療を生かすべきだと反論されたことがあつた。

後年、子息の卓良先生から全日本鍼灸学会と共催でお台場で学会を開きませんかという話があつた時、小川先生の精神は受け継がれているんだなと感じました。

戸部(雄) 小川先生は50歳代になってから輝いていて勢いがありましたね。脂が乗り切つて勢いがついて、赤坂田町の治療所が手狭になってビルに移り、さらに新宿の野村ビルに進出したわけでしょう。その中で東京都の会長をやり、日本鍼灸師会の会長をやりでしょ。これはすごいですよ。

小川 親父は東京都鍼灸師会の会長になるまではほとんど師会活動のようなことはやっていないですよ。世田谷区と港区で師会を作つたくらいで。

戸部(雄) とにかくはやらないことには勢いというものは出ないですよ。

小川 その分だけスタッフが苦勞したんですよ。患者も多かったけれど、スタッフも多くいましたから、最高で17名いましたかね。だからできたという面もあるんですよ。赤坂が発展してきたり、



鍼麻醉が出たりで、すべてがうまく回転して勢いが出たんでしょうね。

岡部 小川先生があれだけ元気だったというのは、よく食べてたからね。

小川 40歳から糖尿病だったんですよ。

岡部 それにしてはよく食べたよね。早いしね。びっくりするほどですよ。それにしてはやせていたしね。

小川 一時は20貫(約75kg)あって、糖尿病でやせたんでしょうね。それに車ばかりだったし。そのわりには長く生きましたよね。

岡田 うな丼を4口で食べてたからね。

小川 本人は糖尿のことは考えていたんですよ。晩年はビールをコップ1杯しか飲まなかったし。食べるのも夜だけで、朝昼はちょこっと食べる程度でね。

岡部 そろそろまとめさせていただきます。

今は情報量も多く勉強しようと思えばいくらでもできる時代ですが、昔は情報も場も少ないとい

う環境の中で、小川先生が経絡治療研究会を引っ張って下さったおかげで今日の経絡治療学会の形ができたと思います。

また日本経絡学会にしても、小川先生が初代理事長として切り盛りして下さったおかげで、経絡治療の集合体としてうまく機能したし、研究発展の場として充実していたと思います。

さらに日本鍼灸師会の会長としては歴代会長のなかでは、特に功績が大きい会長であったと思います。

我々は偉大な先輩を失ったということで、非常に痛手は大きいと思います。これからは経絡治療学会も岡田・馬場の両先生を大事にして、温故知新の精神で頑張っていきたいと思います。

本日はありがとうございました。

編集部注：経絡治療学会・岡部素明先生のご厚意により『経絡治療』誌(P5~13、第139号、平成11年10月1日発行)から転載させて頂きました。

## 在りし日の 小川晴通先生

